metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by
provided by Kwansei Gakuin University R

主の祈りに付加された頌栄の意味

The Meaning of the Doxology Linked to the Lord's Prayer

原　　真　和*

Abstract

The Lord's Prayer of the Protestant churches includes the doxology whereas that of the Roman Catholic Church does not. In this paper the following three questions are discussed. 1. Since when has the doxology been linked to the Lord's Prayer? 2. Why does the Lord's Prayer of the Protestant churches include the doxology? 3. What did Luther and Calvin understand by the doxology linked to the Lord's Prayer?

キーワード：主の祈り、頌栄

はじめに

キリスト教は、様々な伝統や教派に分かれており、異なる伝統や教派の間には、一致できない点も少なくない。それでもなお、「キリスト教」という概念は成り立つのであり、一致できる点も、当然、ある。その一つは、イエスをキリストとして尊重するという点であり、もう一つは、新旧約を聖書、すなわち正典として尊重するという点である[1)]。

聖書の中でも、イエスの言行を伝えている４つの福音書は、とくに重要な意味をもっている。その内の２つ、マタイによる福音書とルカによる福音書によれば、イエスは、「こう祈りなさい」[2)]、あるいは「祈るときには、こう言いなさい」[3)]と言って、祈りを教えた[4)]。これらの２つの福音書が伝えているイエスが教えた祈りは、類似しているが、同じではない。どちらの祈りが、イエスが教えた祈りなのか、あるいは、それにより近いのか、という問いは残るが、キリスト教は、伝統的に、マタイによる福音書にある祈りを主の祈りとしてきた。なぜマタイによる福音書のほうが主の祈りとなったのか、という問いも残るが、結果として、マタイによる福音書にあるほうの祈りが、主の祈りとして、非常に古くから唱えられてきた。

主の祈りは、聖書に書かれており、聖書によると、イエスがそれを教えたのであるとされている。もし、キリスト教のあらゆる伝統や教派が、イエスと聖書を共有しているのであれば、主の祈りにおいて、一致するはずである。しかし、実際は、そうなっていない。「天にまします我らの父よ（天におられるわたしたちの父よ）」から「我らをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ（わたしたちを誘惑におちいらせず、悪からお救いください）」までの、主の祈りの本文の部分に関しては、キリスト教のあらゆる伝統や教派は一致しているが、プロテスタントの伝統では、本文の後に「国と力と栄えとは限りなくなんじのものなればなり」という語句を加えている。この語句は「頌栄」と呼ばれている。プロテスタントの伝統では、ほとんどの場合、頌栄を加えたものを主の祈りと呼んでいる。それに対し

* Masakazu HARA　聖和短期大学 教授

1）厳密に言えば、旧約続編の扱いは、伝統によって異なる。また、新約の目次の順序も、ギリシャ正教とローマ・カトリックとでは、異なる。
2）マタイによる福音書６章９節。
3）ルカによる福音書11章２節。
4）マタイによる福音書６章９節後半～13節。ルカによる福音書11章２節後半～４節。

て、ローマ・カトリックの伝統では、頌栄を加えない本文だけを主の祈りと呼んでいる[5)]。

（1）主の祈りの本文と頌栄が結びついたのは、いつごろなのか。（2）プロテスタントの伝統では、なぜ頌栄が付いたものが主の祈りとされるようになったのか。（3）プロテスタントの伝統において、主の祈りの本文に続けて頌栄を唱える場合、頌栄の部分の意味をどのように理解してきたのか。とくに、*ὅτι*（なぜなら・・・だからである）という語は、どこにかかるのか。直前の「我らをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ（わたしたちを誘惑におちいらせず、悪からお救いください）」の部分か、それとも、主の祈りの本文全体にかかるのか。本論文では、以上の３点を論じる。

（1）主の祈りの本文と頌栄が結びついたのは、いつごろなのか

主の祈りが現れる古代のキリスト教の文書の中で最古のものは、『ディダケー（十二使徒の教訓）』であるとされている[6)]。この文書は、非常に古いもので、青野太潮は、マタイによる福音書の成立の少し後、１世紀末頃に成立したと考えている[7)]。『ディダケー』には、マタイによる福音書との類似点が見られる。また、『ディダケー』には、「福音（書）」という言葉が使われている箇所がある[8)]。それで、

5）現在、日本のプロテスタントの共同体で広く用いられている主の祈りは、下のとおりである。日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌21』（日本基督教団出版局、1997年）、148ページ、93-5-A.

天にます我らの父よ、
ねがわくはみ名をあがめさせたまえ。
み国を来らせたまえ。
みこころの天になるごとく
地にもなさせたまえ。
我らの日用の糧を、今日も与えたまえ。
我らに罪をおかす者を　我らがゆるすごとく、
我らの罪をもゆるしたまえ。
我らをこころみにあわせず、
悪より救い出したまえ。
国とちからと栄えとは
限りなくなんじのものなればなり。
アーメン。

この訳は「1880年訳」と呼ばれている。それに対して、現在、日本のローマ・カトリックの共同体で用いられている主の祈りは、下のとおりである。
http://www.cbcj.catholic.jp/jpn/doc/prayers/00lordpr.htm

天におられるわたしたちの父よ、
み名が聖とされますように。
み国が来ますように。
みこころが天に行われるとおり地にも行われますように。
わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください。
わたしたちの罪をおゆるしください。わたしたちも人をゆるします。
わたしたちを誘惑におちいらせず、
悪からお救いください。
アーメン

この訳は、「日本聖公会／ローマ・カトリック教会共通口語訳」と呼ばれ、2000年から用いられている。公文書としては、「悪からお救いください。」と「アーメン」の間に、下の語句が挿入されていて、プロテスタントの伝統に配慮したものとなっている。

（エキュメニカルな集いなどで、頌栄を続けて唱える場合）
国と力と栄光は、永遠にあなたのものです。

ギリシャ正教の伝統に属する日本ハリストス正教会では、独自の文語訳を用いている。

6）小林恵「主の祈り、主祷文」、今橋朗、竹内謙太郎、越川弘英監修『キリスト教礼拝・礼拝学事典』（日本キリスト教団出版局、2006年）、172ページ。

7）青野太潮「『ディダケー』」、大貫隆、名取四郎、宮本久雄、百瀬文晃編集『岩波　キリスト教辞典』（岩波書店、2002年）、763ページ。一般的には、１～２世紀に成立したと考えられている。

8）Alan J. P. Garrow, *The Gospel of Matthew's Dependence on the* Didache（London and New York: T&T Clark International, 2004）.『ディダケー』の8.2c の部分に、頌栄付きの主の祈りが含まれているが、8.2b は下のとおりである。

ὡς ἐκέλευσεν ὁ κύριος ἐν τῷ εὐαγγελίῳ αὐτοῦ,

普通は、『ディダケー』がマタイによる福音書を参照したと考えられている[9]。

『ディダケー』８章に現れる主の祈りは、マタイによる福音書６章の主の祈りと、ほとんど同じである[10]。『ディダケー』の主の祈りには、下のような頌栄が付いている。

> *ὅτι σοῦ ἐστιν ἡ δύναμις καὶ ἡ δόξα εἰς τοὺς αἰῶνας.*[11]

この頌栄は、現在のプロテスタントの伝統において、主の祈りの本文に付けて唱えられている頌栄と同じではない。「国と（*ἡ βασιλεία καὶ*）」の部分がない。いつ、どういう理由で、「国と」が付け加わったのか、という問いは残る。いずれにしても、主の祈りの本文と頌栄が結びついたのは、非常に早い時期であったと言える。

主の祈りの結びに頌栄が付けられるようになった理由について、北村宗次は、次のように述べている。

> また結びの頌栄については、聖書にはなくて、最古の記録がディダケーまで見いだされないが、ユダヤ教で祈りの結びに自由な頌栄句をつけるように、ほとんど当初から実際には付加されていたであろう[12]。

頌栄が主の祈りの本文に続けて唱えられるようになった理由については、多くの論者が北村と同様の見解を述べている。

また、『ディダケー』や新約各書が最初期のキリスト教の共同体の典礼の言葉を従来考えられていたよりも多く含んでいるという指摘がある[13]。『ディダケー』が典礼における主の祈りを伝えているとすれば、典礼において、主の祈りに続けて頌栄を唱える伝統は、非常に古いものであると考えられる[14]。

（２）プロテスタントの伝統では、なぜ頌栄が付いたものが主の祈りとされるようになったのか

主の祈りは、マタイのよる福音書６章に基づいている。

382年、教皇ダマスス１世（Damasus I, 304頃〜384）は、ヒエロニュムス（Hieronymus, 340頃〜420）に、ラテン語訳聖書の改訂を依頼した。これがラテン語訳聖書「ウルガタ（Vulgata）」の起源とされている。16世紀以降、ローマ・カトリック教会の公認聖書となった1592年版等を経て、1987年、「新ウルガタ（Nova Vulgata）」の刊行に至ってい

9）しかし、Garrow は、『ディダケー』に５つの編集層を認め、主の祈りの部分は第３層に属するものと分析し、その層については、マタイによる福音書のほうが、編集途上にあった『ディダケー』を参照したと推定している。Garrow, op. cit.

10）Garrow, op. cit., p. xxii によると、２箇所で、語尾が異なっている。

11）Ibid.

12）北村宗次「主の祈り」、岸本羊一、北村宗次編集『キリスト教礼拝辞典』（日本基督教団出版局、1977年）、178〜179ページ。

13）Garrow, op. cit.

14）現在の日本のローマ・カトリックのミサの式次第では、下のようになっている。日本カトリック典礼委員会編集『ミサの式次第』（カトリック中央協議会、1999年）。

司祭：主の教えを守り、みことばに従い、つつしんで主の祈りを唱えましょう。
全員：天におられるわたしたちの父よ、（中略）わたしたちを誘惑におちいらせず、悪からお救いください。
司祭：いつくしみ深い父よ、すべての悪からわたしたちを救い、現代に平和をお与えください。あなたのあわれみに支えられ、罪から解放されて、すべての困難にうち勝つことができますように。わたしたちの希望、救い主イエス・キリストが来られるのを待ち望んでいます。
会衆：国と力と栄光は、限りなくあなたのもの。

現在のミサは、聖公会を含むプロテスタントや、正教の伝統を意識している可能性があると思われる。日本ハリストス正教会の『主日奉事式』（1994年）の中の「わが聖神父金口イオアンの聖体礼儀」では、下のようになっている。

詠：　天に在すわれらの父や、願わくはなんじの名は聖とせられ、なんじの国は来たり、なんじの旨は天に行なわるるが如く地にも行なわれん。わが日用の糧を今日われらに与え給え。われらに債（おいめ）あるものをわれらゆるすが如く、われらの債（おいめ）をゆるし給え。われらを誘（いざない）に導かず、なおわれらを凶悪より救い給え。
司：　けだし、国と権能と光栄は、なんじ父と子と聖神（せいしん）に帰す、今も何時も世々に。
詠：　アミン。

通常、上の「司」の部分は司祭が、「詠」の部分は聖歌隊が唱える。

る[15]。この「ウルガタ」の伝統においては、マタイによる福音書6章の主の祈りの部分の後に頌栄は付いていない[16]。ローマ・カトリックの主の祈りに頌栄が付かないことの原因は、ここにあるのではないかと考えられる。

「新共同訳」をはじめとする、現行の、主要な、各国語の聖書においても、マタイによる福音書6章の主の祈りの部分の後に頌栄は付いていない。日本語訳聖書で言えば、1917年の「文語訳」の時点で、すでに頌栄は付いていなかった[17]。それは、最古の写本に頌栄が付いていないことがわかってきたからであった。

しかし、1522年のルター（Martin Luther, 1483～1546）訳や1611年の欽定訳（the Authorized Version, the King James Version）では、頌栄が付いていた[18]。このことが、プロテスタントの伝統において、主の祈りに頌栄を付けることになった原因であると考えられる。

欽定訳の基礎となったのは、ティンダル（William Tyndale, 1494頃～1536年）訳（新約、1525年）であった。ルター訳や欽定訳で、主の祈りに頌栄が付いているのは、ルターやティンダルがエラスムス（Desiderius Erasmus, 1466頃～1536）編集のギリシャ語新約を底本としたからであった。そのマタイによる福音書6章の主の祈りの部分には、頌栄が付いていた[19]。

しかし、ルターは、『大教理問答書』（1529年）において、頌栄が付かない主の祈りを取り上げている[20]。それに対して、カルヴァン（Jean Calvin, 1509～1564）は、『ジュネーヴ教会信仰問答』（1545年）の問256において、頌栄付きの主の祈りを取り上げている[21]。すなわち、ルターは、自らがドイツ語に翻訳したマタイによる福音書6章の主の祈りの部分には頌栄が付いているにもかかわらず、ローマ・カトリックの伝統に従って、頌栄が付かない主の祈りを主の祈りとしたのではないかと考えられる。それに対して、カルヴァンは、おそらく、当時の新しい知見によって、頌栄付きの主の祈りを主の祈りとしたのではないかと考えられる。

（3）頌栄の部分の意味をどのように理解してきたのか

プロテスタントの伝統において、主の祈りに付加されている頌栄は、ギリシャ語で表記すると下のようになる。

> *ὅτι σοῦ ἐστιν ἡ βασιλεία καὶ ἡ δύναμις καὶ ἡ δόξα εἰς τοὺς αἰῶνας.*
>
> 私訳：
> なぜなら、支配と権力と賞賛は、いつの時代も、あなたのものだからです。

さて、上の頌栄を、主の祈りの一部とみなした場合、*ὅτι*（なぜなら・・・だからです）はどこにかかるのか。直前の「我らをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ（わたしたちを誘惑におちいらせず、悪からお救いください）」の部分か、それとも、主の祈りの本文全体にかかるのか。

カルヴァンは、『ジュネーヴ教会信仰問答』の問294において、主の祈りに付加された頌栄を扱っている。

> **問294**　「国と、力と、栄えとは、限りなく汝のものなればなり」との結びの言葉が付け加えられたのは、何を言わんとするものですか。
>
> **答**　私たちの祈りが私たちの確信に立つより

15）手塚奈々子「ウルガタ」、大貫隆、名取四郎、宮本久雄、百瀬文晃編集『岩波　キリスト教辞典』（岩波書店、2002年）、132ページ。
16）Nestle-Aland, *Novum Testamentum Latine* (Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1984).
17）『日本語ヘクサプラ　六聖書対照新約全書』（エルピス、1994年）。
18）永嶋大典『英訳聖書の歴史　付：邦訳聖書小史』（研究社出版、1988年）、67ページ、118～119ページ。
19）永嶋大典、『エラスムス校訂「新約聖書」1516年初版復刻本　付録＜解説＞』（臨川書店、1989年）、1～10ページ。ルターやティンダルが底本としたのは、1519年の第2版であった。初版、第2版ともに、マタイによる福音書6章の主の祈りの部分には、頌栄が付いていた。
20）ルター著作集編集委員会編『ルター著作集　第一集　第八巻』（聖文舎、1971年）。ルターは、第1部「神の十戒」においていわゆる十戒を扱い、第2部「私たちの信仰の主要なる個条」において使徒信条を扱い、第3部「キリストの教えられた祈り、すなわち主の祈り」において主の祈りを扱っている。以下、第4部「洗礼について」、第5部「聖餐について」という構成になっている。
21）J.カルヴァン著（渡辺信夫編訳）『ジュネーヴ教会信仰問答：翻訳・解題・釈義・関連資料』（教文館、1998年）、68～69ページ。

> も、むしろ神の力と慈しみに支えられていることを、今一度思い起こさせるためであります。さらに、私たちのすべての祈りが神讃美をもって結ばれることを教えるためであります[22]。

カルヴァンは、ここで、まず、主の祈りに付加された頌栄が神讃美、すなわち、文字どおり「頌栄」であると言っている。頌栄の言葉の意味は、ここでは説明されていないが、おおむね、次のように解釈されていると考えられる。

> なぜなら、あなたこそ、いつの時代も、（全世界の、真の）支配者であり、全能であり、（かつ、慈しみに満ちておられるがゆえに）賛美すべきお方だからです。

そして、カルヴァンは、私たちが神に祈ることができ、神にこそ祈るべきなのは、私たちが主観的に神を信じているからではなく、神が、客観的に、全世界の真の支配者であり、全能者であり、かつ、慈しみに満ちておられるがゆえに賛美すべきお方であるからであると言っている。すなわち、カルヴァンによれば、主の祈りに付加された頌栄は、文字どおり頌栄（すなわち、神賛美）であり、主の祈りを含む、あらゆる祈りの根拠であるということになると考えられる。そして、*ὅτι*（なぜなら・・・だからです）がどこにかかるのかという問いの答えは、カルヴァンの『ジュネーヴ教会信仰問答』においては、主の祈りの本文全体にかかるということになると考えられる。

他方、ルターは、『大教理問答書』において、頌栄が付かない主の祈りを主の祈りであるとしているので、その書においては、「国と力と栄光は・・・」に言及していない。しかし、ルターは、自らドイツ語に翻訳したマタイによる福音書６章においては、エラスムス編集のギリシャ語新約の本文に従って、主の祈りの後に頌栄を付加している。ルターの頌栄の解釈は、彼の「山上の説教」に関する説教において、見ることができる[23]。

そこにおいて、ルターは、まず、

> さて、本文には、主がこの祈りの締めくくりでお加えになった、感謝と共同の信仰告白のような部分がある。「国と力と栄えとは限りなくあなたのものだからです」。これらは神にのみふさわしい、真の称号であり名である[24]。

と述べている。ここでは「感謝と共同の信仰告白のような部分」という言い方であるが、頌栄は、文字どおり、頌栄、すなわち神賛美であるという点については、先に見たカルヴァンの解釈と大きくは異なっていないと考えられる。

しかし、ルターは、それだけにとどまらず、さらに、「神が僕としてその支配を完成させるよう委せられた者」、「神によりその職務を得ている者」、「神に代わってその権威の座にある人」について論じ、具体的には、「父母、主君、裁判官、君侯、王、皇帝のような神の職務と地位」について述べている。そして、「罰する者は神に代わってそれを行うのであり、・・・だれも自分で報復し、罰すべきではない。それは彼の職務ではなく、力及ばず、成功もしない」と言い、さらに、

> 同様に、「栄光」、または名誉、賞賛も神ご自身のみのものであり、神を通して、または神による以外には、だれも知恵や聖さ、能力を誇ることはできない。なぜなら、私が王や君侯を敬い、「恵み深い君主」と言い、彼らの前にひざまずいたとしても、それは彼ら個人のゆえではなく、神のゆえであり、神に代わってその権威の座にある人だからである。また同様に、私が父母やその代理の人々に敬意を表すとしても、その人々にではなく神の職務に対して行うのであり、彼らにおいて神を敬うのである。

と述べている。ルターは、「国」を支配、統治、「力」を権力の行使、とくに罰を与えること、「栄え」を名誉、賞賛、尊敬を受けることと解釈している。ルターは、さらに、神のためにではなく、自分のため

22）カルヴァン、前掲書、79ページ。
23）マルティン・ルター「マルティン・ルター博士によって説教され、講解されたマタイによる福音書第５章、第６章、第７章　1532年」、ルーテル学院大学ルター研究所編集『ルター著作集　第二集　第５巻（新約聖書序文、山上の説教）』（リトン、2007年）。
24）マルティン・ルター、前掲書、223ページ。

に、支配し、権力を行使し、名誉を求めることを、悪魔と結びつけている[25]。

さて、*ὅτι*（なぜなら・・・だからです）がどこにかかるのかという問いの答えであるが、頌栄を文字どおり頌栄ととらえた場合は、先に見たカルヴァンの場合と同様に、主の祈りの本文全体にかかると考えられるが、自分のために「国と力と栄光」を得ようとすることを「誘惑」や「悪」と結びつけて考えるならば、*ὅτι*（なぜなら・・・だからです）は、頌栄のすぐ前の、「我らをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ（わたしたちを誘惑におちいらせず、悪からお救いください）」の部分にかかると考えることができる。すなわち、ルターは、この説教において、頌栄を文字どおり頌栄ととらえるだけでなく、自分のために「国と力と栄光」を得ようとすることを、誘惑や悪の典型例として、戒めている。

おわりに

私見であるが、主の祈りには、十戒との構造上の類似が認められる。出エジプト記20章の十戒の部分を分析すると、下のように項目化することができると思われる。

わたしは主、あなたの神。（神の名乗り）

1．私をおいてほかに神があってはならない。
2．像を造って、それらにひれ伏したり、仕えたりしてはならない。
3．主の名をみだりに唱えてはならない。
4．安息日を心に留め、聖別せよ。
5．父母を敬え。
6．殺してはならない。
7．姦淫してはならない。
8．盗んではならない。
9．隣人に関して偽証してはならない。
10．隣人の家を欲してはならない。

前半が神に関する戒め、後半が人に関する戒めになっていると見ることができる。しかし、その境目は必ずしも明らかではない。普通は、1～4が神に関するもので、5～10が人に関するものであると思われるが、5については、父母の宗教を尊重するという意味が含まれているとし、これを神に関する戒めに数え、5＋5＝10としようとする意見もある。イエスは、逆に、「安息日は人のために定められた」と言っている[26]。普通に考えた場合は、4＋6＝10となり、人に関する戒めのほうが神に関する戒めよりも多くなる。

マタイによる福音書6章の主の祈りの部分を分析すると、6つの項目が認められる。ルカによる福音書11章の主の祈りの部分では、5つの項目が認められる。いずれにおいても、前半が神についての祈り、後半が人についての祈りとなっていると見ることができる。父への呼びかけに始まる主の祈りは、十戒に対する応答のような構造をもっていないだろうか。この構造上の類似は、偶然によるものか、意図的なものか。

また、主の祈りは、祈りであって、戒めの形にはなっていないが、天の父の、み名を尊び、み国を求め、み心をおこない、自分や他者の糧のために働き、罪のゆるしを求め、人をゆるし、誘惑や悪を退けようとすることは、必要かつ十分と言ってよいほどの、人間の生活の指針となるものではないだろうか。そして、主の祈りは、祈りであり、神とともに、神の助けによって、そのような生き方をしようとする意思表示であると言える。しかし、福音書は、主の祈りと十戒との関連性について、明示的には語っていない。

「主の祈り」とは、「イエスが教えた祈り」という意味である。しかし、主の祈りに付加された頌栄は、マタイによる福音書まで遡ることはできないと考えられている。しかし、「国と」が欠けているとはいえ、主の祈りと頌栄の結びつきは、『ディダケー』に見られ、1～2世紀にまで遡れると言える。

プロテスタントの伝統において、主の祈りに頌栄を付けることになったのは、思想的な理由からというよりも、むしろ、聖書翻訳史の流れの中でそうなったと言える。結果として、頌栄付きの主の祈りは、プロテスタントの世界的な伝統となっている。頌栄付きの主の祈りを唱えるのであれば、その意味を考えたい。その際、頌栄が文字どおり頌栄であることは否定できないが、ルターのような理解を心に留めることによって、頌栄がいっそう意義深いものとなるのではないだろうか。

25）マルティン・ルター、前掲書、223～224ページ。
26）例えば、マルコによる福音書2章27節。